

「百万」と南都律宗

松岡心平

「百万」の能のシテの登場は、変わっていてもしろい。

吉野に住む男(ワキ)が、奈良の西大寺で拾った少年(子方)を連れて京都清涼寺の大念仏に参り、門前の者(アイ)と会話を交わす。そのアイが始めた念仏の音頭の取り方が悪いと言つてシテの百万が登場するのである。

アイと地謡が「南無釈迦牟尼仏」「南無釈迦釈迦釈迦」と交互に誘い、アイが「さわみさ、さわみさ、さわみさ」と唱えて回つてるところを、するすると出てきたシテが笹で打ち、アイが「蜂が刺した」と驚くと、シテは「あら悪念仏の拍子や候。わらは音頭を取り候ふべし」と言つて、今度は「南無阿弥陀仏」と自ら音頭を取り始めるのである。

「さわみさ」とアイが唱えるのは、「ハハミタ(母見た)」のなまつた形と考えられる。清涼寺の大念仏会は、奈良唐招提寺の律僧導御が弘安二年(一二七九)に始めたものだが、『嵯峨清涼寺地藏縁起』によれば、捨て子であった導御は、母に会いたいこともあつて大念仏会を始め、その際自ら「母見(ははみ)」と唱え、聴衆もそれに「母見」と合唱して答えたのだという。

導御は、大念仏の参加者が十万人を超えることに石幢を立てたので「十万上人」と呼ばれ

た。その母が女曲舞百万であつたとするのは伝説かもしれないが、清涼寺大念仏会には最初から母子の再会物語がまとりついていたのである(細川涼一「導御・嵯峨清涼寺融通大念仏会・「百万」」「女の中世」所収)。

それでは、アイが「南無釈迦牟尼仏」と唱える一方、シテが「南無阿弥陀仏」と唱えるのをどう考えればいだろうか。「百万」では、シテが(クセ)を舞上げ、「あらわが子恋しや」と西大寺で生き別れた子どもを探して立ち回つた後に、地謡による祈願の言葉が「南無阿弥陀仏、南無釈迦牟尼仏、南無阿弥陀仏」と、心ならずも逆縁ながら、誓ひに逢はせて賜ひ給へ」と展開するが、ここでもまた二つの念仏が混交している。

その答えは、鎌倉仏教史、とくに法然の主張する浄土教に対する南都旧仏教側からのリアクションの歴史の中にある。

法然の浄土教は、信仰面では専修念仏の阿弥陀信仰であつたが、それは同時に旧仏教側に仏教者としての生き方へのきびしい反省を迫るものであつた。これに対して、旧仏教の側は、教理面での反論以上に、みずから襟を正すことを迫られていて、そのときに釈迦を強烈に思慕し、釈迦に帰ることによつて仏教者としての原点を見つめ直そうとする釈迦原

理主義が生まれてくる。

その思想を生きた典型が明恵上人であり、彼は能「春日龍神」が描くように、釈迦が生まれ仏法を説いたインドを直接目ざそうとしたのである。

「春日龍神」に、「春日大明神は」上人(明恵)をば太郎と名づけ、笠置の解脱上人をば次郎と頼み、左右の眼、両の手のごとく、たよりにして、とされる解脱上人貞慶もまた、南都の釈迦信仰を引っぱるリーダーであつた。

たとえば春日四所明神の一宮の本地仏については、中世初期には藤原氏の人びとが不空絹索観音説をとつていたが、貞慶が釈迦本地説を言い始め、やがてこれが主流になる。「春日龍神」に見える、春日山(三笠山)の靈山浄土観(春日山は釈迦が説法をしている聖地とする見方)も、貞慶の世界観が世に流布した結果であつた。

貞慶・明恵の釈迦原理主義を、戒律の重視という形でしっかりとめたとのが、鎌倉時代中期に活躍する叡尊や忍性ら西大寺流、覚盛ら唐招提寺流の南都律宗の人たちであつた。

貞慶はまた建仁三年(一一〇三)、鑑真が釈迦の舍利(遺骨)をもたらした聖地である唐招提寺で、寺の復興も目ざして、釈迦念仏会を始めていた。この釈迦念仏会を引き継いだのが、律僧として唐招提寺に入り(寛元四年(一二四四))、唐招提寺を律宗寺院として復興した覚盛であり、その流れは孫弟子の導御にしっかりと受け継がれていった。

もとより嵯峨の清涼寺には、奮然が寛和二年(九八六)に宋から持ち帰った、三国伝来・

生身の釈迦牟尼仏像が置かれていて、そこは釈迦信仰のメッカである。さらに清涼寺の釈迦像は、南都での釈迦信仰の興隆をうけて、主として律宗の寺々で、その模刻像が製作される。西大寺では叡尊の発願によって建長元年（一二四九）に造られ、唐招提寺では、覺盛の弟子證玄の代に、釈迦念仏の本尊として造立される。だから導御は、唐招提寺で清涼寺式釈迦像を前に釈迦念仏を行っていたのであり、その南都の釈迦念仏の京都進出が、弘安二年（一二七九）の清涼寺大念仏会の創始となったのである。その際、平安時代後期に良忍によって興されて清涼寺の信仰の中心であった阿弥陀信仰の融通念仏との合体が試みられた。したがって大念仏会始行の時から、「南無阿弥陀仏」と「南無釈迦牟尼仏」は混交していたと見られ、これが能「百万」にも見事に反映した形なのである。

『春日権現験記絵』（巻八）には、奈良から京都へ移任した春日信仰の篤い女性が、春日大明神を拝めないで困っていると、清涼寺に春日大明神がいるからそこへ行きなさいとアドバイスされたという話がみえる。さきに述べたように、貞慶の世界観が流布して春日大明神Ⅱ釈迦なので、このような話となる。

春日山には釈迦がいて、清涼寺には春日大明神がいて、春日山と清涼寺がつながっているという世界観を背景にして、「百万」の奈良から京都への道行（百万の曲舞）を考えるべきだろう。「奈良の都を立ち出で」た曲舞々百万は、「帰り三笠山」としつかり春日山に挨拶をしてから、釈迦の模刻像がある西大寺、子を失った西大寺に別れて京都にのぼり、清涼寺に着いて生身の釈迦を賛美し、そこで子ども

に出会うのである。

清涼寺本などの『融通念仏縁起絵』の清涼寺大念仏会の段には、釈迦堂広縁の台の上で、二人の黒衣の律僧が胸前の鉦鼓を打ちながら浮かれ踊り、その隣にもう一人の律僧が錫杖で拍子をとっている様が描かれ、釈迦堂の前の庭には猿曳や鉢叩きなどの賤民芸能者が参集している様が描かれる。このシーンは、そのまま能「百万」で、大念仏会に参加した女曲舞百万が自ら念仏の音頭をとる場面につながるだろう。

これは一遍の踊り念仏と同じように、大念仏会という、律僧導御が新たに組織した、祝祭的フォークローア世界と地続きの仏教行事が、芸能の中心的トポスとして機能していることを示すものだし、また「百万」の例は、中世芸能が仏教との新たな結合の中で活性化していく過程を象徴してもいる。

それだけではない。能「百万」には、南都で流行した釈迦念仏が律僧導御により京都進出を果たし京都を席捲したように、南都の女曲舞百万（世阿弥「五音」の京都進出、ひいては観阿弥・世阿弥たち大和猿楽による京都進出と制覇さえもが寓意されているのではないだろうか。

清涼寺大念仏会に賤民芸能者たちが参集するのは、南都律宗の僧たちが精力的に推し進めた非人救済事業と無関係ではありえない。

西大寺流律宗の祖である叡尊は、奈良坂の般若寺を復興し、般若寺文殊菩薩像の完成を記念して文永六年（一二六九）、奈良坂非人たちに大施行を行っている。忍性に至ってはハルセン病患者を毎日おぶって奈良坂の乞場に

運んだと伝えられ、導御にも非人救済の実績がある。

能「百万」は、〈クセ〉の冒頭で、奈良坂に触れている。女曲舞百万が自らの過去を振り返るところで、

奈良坂の、児の手柏の二面、とにもかくにもねぢけ人の、亡き跡の涙越す、袖のしがらみ隙なきに……

とある。『万葉集』三三三六番歌「奈良山の児の手柏の二面とにもかくにもねぢけ人かな」を引いた文飾だが、『万葉集』のときには、二股膏薬のおべっか使い程度の意味であった「ねぢけ人」という言葉のなかへ、中世になって非人のイメージが強力に入っていく、それとともに歌の初句が「奈良坂の」に変わり、それを「百万」は引くのである（松岡稿、奈良山と奈良坂）『能—中世からの響き』所収）。ポイントはその先にある。「ねぢけ人の、亡き跡の涙越す」は、自分の夫についての記述だが、そのあたり、日本古典文学大系『謡曲集』上の頭注が「あれこれ考えると、今は意地悪にすら感じられる夫の死後は、涙は袖にあふれて絶え間なく流れ」と的確に訳している。「ねぢけ人」に「今は意地悪にすら感じられる夫」という意識の上に、さらに奈良坂非人の意味を重ねれば、百万の夫は奈良坂北山宿の非人であったことになる。奈良坂北山宿と、声聞師芸の代表である曲舞との密接な関係からすれば、当然あり得る夫婦縁組である。

百万は、奈良坂の夫に早くに死に別れ、忘れ形見の息子にも西大寺で生き別れてしまった女性芸能者だと、能は設定したのではないだろうか。

（東京大学教授）